



聞き耳の  
世界



川崎ゆきお

「夏は終わったはずなのに」

「暑いですねえ、まだ。夏の真っ盛りより、残暑の方がこたえるかもしれません。暑さ疲れが溜まっているのです。長く暑かったですからね、長いとバテます。こちらで平年なら涼しくなるはずなのですが、今年はおかしいですねえ」

「気温的には大したことはないのですが、どうしてこう蒸し暑いのでしょうか」

「それぞれ、蒸すんです。これは秋の空気じゃない。だから、暑い。仰る通り蒸し暑い」

「それで体調が崩れたのかどうか、よく分かりませんが、夏バテです」

「まあ、秋先に夏の疲れがどっと出ることがありますが、まだ暑い。だから、それとはまた違うのかもしれない。普通に暑いのでバテたのでしょうか」

というようなことを喫茶店で老人達が話している。それを聞いていた青年は、他に話すネタはないのかと、少し可笑しかった。しかし、その後、野球の話になっている。首位の二球団が競り合っており、どちらが優勝するのか、分からない。この老人達は同じチームを応援している。だから、それで言い争うようなことはないのだが、その中の選手に対しての臆服度が違う。お気に入りの選手に対しては、非常に親しみを込めて語る。その口ぶりはまるで身内だ。孫のように。そこで、少しだけ他の老人と食い違いが生じるが、大したことはない。言い争いになるようなことではない。

また、同じ臆服の選手でも、臆服の仕方が違うし、褒める箇所も違う。ここで見方が違ってくるのだ。そしてそれは自分自身を投影しているのだと、青年は考えた。プレイしているのは老人なのだ。そこに自分自身を見出すのだろう。これはスポーツ観戦ではよくあることだ。

大相撲でも、自分と体型の似た力士を臆服にしたりする。また、気質が似ていたりも。相撲と現実生活や仕事とは違う。しかし、前へ前へ出る力士、すぐに引いて相手を引き倒す力士、また曲者と呼ばれる技巧派の力士。これも自分自身の投影だろうか。

さて、青年は聞き耳を立てるのを辞め、ノートパソコンを開け、仕事を始めた。これはやることがあるからやっている。仕事なのでやっていることだ。この仕事がなくなれば、こんな重いノートパソコンを持ち歩く必要はない。

青年はブックマークしていた記事や、エバーノートなどでスクラップしていた記事を読み始めた。

老人グループはケータイのままでいいのか、スマホはどうかと話している。しかし、結論は出ているようで、ケータイで十分ということだ。そして、妙な課金に自動的に引っ掛けられることや、何でもOKやイエスを押していると、知らない間にサービスを申し込んだことになり、契約したことになるので、危険だと。それは家族の誰かが、凄い金額を請求されたので、よく見ると、使っていない複数のサービスの基本料金だった。解約するには方法が分からず、電話も分からない。スマホは電話機なのに、電話で苦情も言えない。

こういうことがあるので、スマホは危ないと。だからケータイで電話だけをやるのがいいのだと。新しいものには畏があり、知らない間にかかっている。そう言うことを語り出した。

聞くつもりはなかったが、青年はまた耳を立てた。しかし、ふと思うのだが、スマホについて語っているが、それは本当にスマホだろうか。

きっと今売られているスマホについて語っているのだろうが、別の端末の話のように聞こえる。きっと同じメーカーの同じ機種であったとしても。

了